



伝授者／*In doctrinain*
(1979)／クリストファー・プリースト (鈴木博
訳)／サンリオ (文庫・
5/30刊・¥480)

現代イギリスの代表作家、プリーストの処女長編が、本書である。

南極の集中研究所から、ブラジルに運ばれたウェンティック博士が見た、ジャングルに忽然と現われた円形の草原——そこには、監獄と呼ばれる建物があつた。

ある意味での「夢の世界」が、この作家の重要なテーマなのだが、狂気に冒された閉鎖空間を描く、第一部「監獄」に、同質の雰囲気を感じとれるだろう。

やがて、第二部「病院」に至って、謎は解明される。しかし、その真相が、かえって虚構化されて見えるのは不思議だ。ありえないはずの狂気のほうが、むしろ現実的なのだ。プリースト自身、そこには気が付いていて、以後、無理に現実を与えようとしていない。

第三部「集中研究所」は、未来社会の病院から、博士が、現代に帰還するエピソードである。けれども、その現代は、破滅の中に、消え去ろうとしている。ちょうど、『ドリーム・マシン』の主人公が、失われつつある、夢のウェセックスに帰っていったように。

著者の資質が、いくつも見いだせる、なかなかの秀作である。(俊)